

# 義務教育学校における総合的な学習の時間の新提案 — 村民憲章を軸にデザインする「ふるさと学習」の展開 —

鈴木 大介                      水川 和彦  
大野郡白川村立白川郷学園   岐阜聖徳学園大学教育学部

A new proposal for comprehensive learning time  
in compulsory schools:  
Development of “Furusato Learning” designed around the villager’s charter

Daisuke SUZUKI, Kazuhiko MIZUKAWA

キーワード：義務教育学校 総合的な学習の時間 村民憲章 カリキュラムマネジメント ふるさと学習

## I. はじめに

### 1. 新学習指導要領が目指すもの

総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指している。よって、探究的な学習の過程において、課題解決に必要な知識や技能を身に付けることはもとより、そのよさを味わうことができるようにすることが求められている。さらに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、情報を集め、整理分析してまとめ、表現できるようにすることが大切になる。

これからの総合的な学習の時間におけるカリキュラムマネジメントは、より主体的で創意工夫を生かしたダイナミックな教育活動を展開していくことが強調される。

### 2. 本研究の目的

これまでの総合的な学習の時間における実践については、「学校により指導方法の工夫や校内体制の整備等に格差がある。」「総合的な学習の時間の指導方法が個々の教師任せになったり、学校全体で取り組む体制が整っていないなど、学校によって差がある。」「探究のプロセスの中で「整理・分析」、「まとめ・表現」に対する取組が不十分である。」「児童生徒が自分の考えを整理して、それをもとに分析し、分かりやすくまとめ、発表したり発信したりする取組が十分でない。」「社会に開かれた教育課程の実現に向け、実社会・実生活にかかる課題をより積極的に取り扱うことが必要」といった課題が指摘されている。<sup>1)</sup>

これらは、校内体制の整備、探究のプロセスの充実化、実社会・実生活との関連に課題があるとも言え換えることができる。そこで本研究は、これらの課題を踏まえ、義務教育学校という、本校の稀有な教育システムを活用して特色ある活動内容を切り出すとともに、カリキュラム・マネジメントを行い、ダイナミックな総合的な活動の時間としての新提案にしたいと考えている。

## II. 実践研究の方法

### 1. 義務教育学校というシステムを活用した特別な教科「村民学」の実施と校内体制の整備

白川郷学園は世界遺産白川郷唯一の義務教育学校であり、さらにコミュニティ・スクールでもあることを生かし、村民憲章と関連させた特別な教科「村民学」の9年間のカリキュラムを開発する。実施に際し、地域や外部の人的・物的資源を効果的にするために、コミュニティ・スクールの学校支援部と連携し、「ふるさとアシスタント制度（以後F A）」を活用する。次に本実践で独自開発した「探究的な学習のサイクルを効果的に行うための視点」を活用し、カリキュラムをどのように開発し、実践し、生徒がどのように変容したのかを検証する。具体的には、第8学年を対象とした「白川村の未

来の担い手づくり」のカリキュラムを紹介する。

### Ⅲ. 実践内容

#### 1. 義務教育学校のシステムを活用した特別な教科「村民学」の実施にあたって

白川郷学園は、学校教育法の改正により、平成28年度から全国で設置することが可能となった完全小中一貫教育を推進する義務教育学校のひとつであり、研究開発校に匹敵する柔軟かつ特別な教育課程を編成・実施することが可能な学校である。

したがって、児童生徒の発達段階に即した義務教育9年間一貫教育の教育課程の編成・実施が可能となる特徴をもつ学校である。よって、本校独自の特別な教科「村民学 ふるさと白川郷」のカリキュラム開発にあたり、下記の3点について留意した。

##### ア：「村民憲章」と関連させ、9年間を見通したカリキュラムを構想すること

本村では、ふるさとを学ぶ目的に、「白川村の未来の担い手育て」という側面が強く意識されている。それは、村の歴史・伝統・文化を深く学ぶとともに、村民としての誇りを学ぶことでもある。その意味から、本実践では、村民のくらしのよりどころとなっている「村民憲章」と関連させ、9年間連続して「白川村」を深く学ぶことができるようにする。

##### イ：発達段階に即したカリキュラムの内容や質を設定すること

1年生から9年生までを見通し、「体験的な学びから知識へ、そして知恵を学び、現実的な課題の解決に向けて」と一連の学習になるようにカリキュラムを編成する。この際、コミュニティ・スクールの学校支援部と連携し、「ふるさとアシスタント制度（以後F A）」を活用する。

##### ウ：年間や単元の探究的な学習のサイクルを効果的に行うこと

年間テーマや探究する対象が決まっても、どのように探究的な学習のサイクルを効果的に行うかが重要である。本実践で開発した「探究的な学習のサイクルを効果的に行うための視点」を意識したカリキュラムを編成・実施する。

#### (1) 「村民憲章」と関連させたカリキュラムの開発について

表1 白川村 村民憲章

ふるさと学習は全国的に多くの実践があり、各校特色ある教育を展開している。しかし、ふるさとの人的・物的資源をトピックス的に活用し、断続的な学習やイベント的な学習が多いのではないかと感じている。そこで、本校では、村民のくらしのよりどころとなっている「村民憲章」を取り入れ、総合的な学習の時間のカリキュラムを編成した。なお、本村では、この憲章は、大人はもとより保育園児まで全員、唱和することができる。

『白川村 村民憲章』 わたくしたちは、霊峰白山のふもと、美しく厳しい自然と香り高い文化に恵まれた白川村民です。 美しい風土を誇り 自然を守ります 純朴な心を失わず 感謝の生活をします 豊かな文化をたつとび 伝統をいかします きびしい自然に負けず たくましく生きます たがいに力をあわせ 住みよい村をつくります 昭和50年11月1日制定
--

よって、この村民憲章そのものを学びの中核に位置付け、1年生から9年生までのカリキュラムを構成した。このことにより、児童生徒も指導する教師も、学ぶ目的や学ぶ内容が明確になり教育課程を児童生徒、教師、地域が共有しながら進めることができるものと考えた。

#### (2) 発達段階に即したカリキュラムの内容や質を設定すること

##### ① 1年生から9年生までの発達段階における各学年テーマと内容の設定

次ページの図1に示すのが、各学年テーマ及び内容である。カリキュラムを開発にあたっては、1年生から9年生までを見通し、「体験的な学びから知識へ、そして知恵を学び、現実的な課題の解決に向けて」と、一連の学習になるように編成した。

例えば、前期課程1年生、2年生は教科「生活科」と関連させ、体験的そのものを充実させる。

3年生、4年生は体験的な活動を通して、先人の知識を獲得する。5年生、6年生、7年生では、伝統や文化の継承、さらには現在の生活にどのように生かされているか、知恵を学ぶ。後期課程（7年生から9年生）では村民憲章にある「たがいに力を合わせ、住みよい村をつくります」の条文にあ

るように、行動に移していく。現在白川村のために活動している人や今後の白川村をどうしていくかなど、白川村で現在活躍している人や今後の課題に向かっている人に目を向けていく。特に、7年生では、地域の担い手を訪問し、8年生では白川村の現実的な課題に取り組む、9年生では最後の出口として、村議会に提案をする。

さらに、村民学の発達段階による学びのイメージを図2にまとめた。縦が発達段階、横の広がり が体験や知識、活動量を表している。このイメージ図は平成30年度の生徒会の執行部（9年生）とともに作成したものである。生徒が白川郷学園のカリキュラムを理解し、イメージ化している点が特徴である。教師が意図的・計画的に実施しているカリキュラムを生徒と共有できており、さらに生徒自身が、学びが段階的であることを理解していることが分かる。さらに本校がブロックと呼び設定している発達段階ごとに、低ブロック段階（1年～4年）を「知る段階」、中ブロック段階（5年・6年）を「知っている段階」、高ブロック段階（7年～9年）を「している段階」とタイトルを付けた点も特徴である。

②コミュニティ・スクールの学校支援部と連携し、「ふるさとアシスタント制度」を活用する。

本校はコミュニティ・スクールであり、学校支援部と地域活動部の2つを合わせた「地域学校働活動」が推進されている。そして、この地域学校協働活動の中に、各学年のふるさと学習に合わせたアドバイザーを選定している。また教員が地域でわからないことがある場合、この本部に連絡すればアドバイスをもらえる仕組みもある。

具体的には、年度当初にふるさとアドバイザー（FA）との企画会があり、この段階で年間の「村民学」のカリキュラムを確認するなど、実施前の企画段階から、地域の教育力を活用することができるようにしている。ふるさと学習は担任の負担が大きいことが特徴であるが、カリキュラム編成時からFAとのコラボレーションをすることにより、「学びの目的」や「ひと・もの・こと」が合理的で効率的な仕組みで実施できることが特徴である。

（3）年間や単元の探究的な学習のサイクルを効果的に行うこと

①探究的な学習のサイクルを効果的に行う上での三つの視点について

「村民学」のカリキュラムの開発にあたっては、学園独自に構想した「探究的な学習のサイクルを効果的に行う上での三つの視点」を意識し、カリキュラムを作成した。その三つの視点を以下に記す。

学年	白川村 村民憲章	学年のテーマ
9	【動きだそう！白川びととして】	白川村の「貢献者」
8	たがいに力を合わせ 住みよい村をつくれます②	白川村の「未来の担い手」
7	たがいに力を合わせ 住みよい村をつくれます①	白川村の「若者担い手活動」
6	純朴な心を失わず 感謝の生活をします	白川村の「結」と「守る会」
5	豊かか文化をたっぴ 伝統を生かします②	白川村の「伝統芸能」
4	豊かか文化をたっぴ 伝統を生かします①	白川村の「合掌家屋」
3	きびしい自然に負けず たくましく生きます	白川村の「伝統食」
2	美しい風土を誇り 自然を守ります②	白川村の「農村風景」
1	美しい風土を誇り 自然を守ります①	白川村の「豊かな自然」

図1 村民憲章と関連した各学年のテーマ

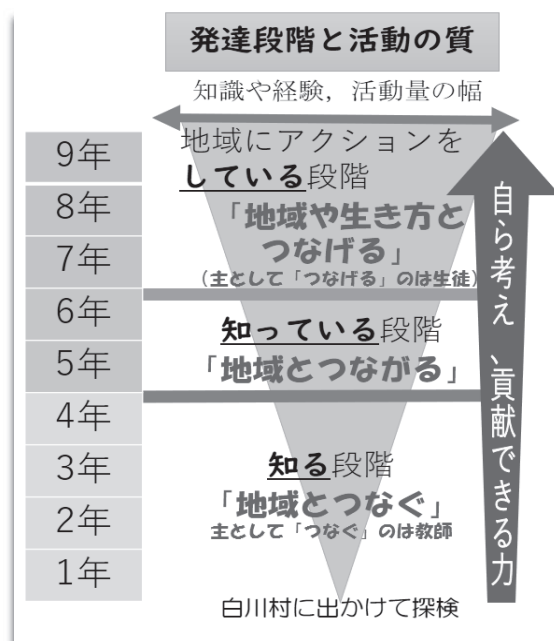


図2 生徒と考案した村民学の発達段階



図3 FAとのカリキュラム開発

三つの視点は表2に示す「リアル」「ハードル」「ゴール」の三つである。

表2 「総合的な学習を効果的に行う上での三つの視点」とその場面設定

視 点		「探究的な学習のサイクルを効果的に行う上での三つの視点」の場面設定
「リアル」	I	主題に対する興味を喚起して学習への動機付けを行うため、現実的な課題、もしくは現実的な場面に類似した(ありそうな)課題を設定する。その際に、架空の人物や状況を設定する。設定する対象を地域とする。
	II	目の前の問題に対しては、これまでに獲得した知識や技能だけでは必ずしも十分ではないという問題意識を生じさせる条件を設定する。
「ハードル」	III	必要となる知識や技能を獲得し、試行錯誤しながら問題の解決に向けた学習活動を行う。未知の問題に対して多くの考えの中でよいものを選ぶ場を設定する。
	IV	対話を通じて他者の考え方を吟味し取り込み、自分の考え方の適用範囲を広げる場を設定する。子供同士による協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方などを手掛かりに自己の考えを広げる場とする。
「ゴール」	V	地域の方や講師から、現実にはどのように課題を解決しているのかを聞き、自らの学びと比較する場を設定する。社会や世界、とりわけ地域にどのように関わっているのかを考える場や、自らの学習活動を振り返って次の学びにつなげる場の設定を設定する。

「リアル」とは、現実、もしくは現実に近い課題を設定することである。また、この「リアル」は三つ目の「ゴール」とも関連している。教室で課題を設定し、教室で仲間の交流で学習を終えるようなカリキュラムでは後期課程の発達段階では不十分だと考えられる。いかにリアリティのある問題に出会わせ、課題を設定させることができるのか、生徒自身が「やりたい」「追究したい」と思える課題を設定するかが重要となる。

「ハードル」では、生徒に適度抵抗を与えるということである。探究のサイクルを回していく中で、この「ハードル」に出会わせる、または出会い、乗り越える経験を行うことが生徒の達成感や充実感につながる。この「ハードル」の設定は、教師がカリキュラムを構成していく中で、自身が出会ったハードルを生徒に出会わせることや、上手くできないだろうという事案にも生徒自身に取り組みせ、try&errorを経験させてもよい。ただし、明らかに解決が不可能な条件や環境については、事前に教師が取り除くか、中止、他者の協力による解決などにより調整する必要がある。

「ゴール」とは、見通しを持たせることであり、大きくは最終の目的がはっきりしていることである。この「ゴール」は、学校内ではなく、地域や社会を意識した活動が望ましい。例えば、自分の考えを発表するという場では、教室で同じ学級の仲間に発表するのではなく、地域の集会場で発表する場を与えることや、議会での発言をさせてもらうなどがよい。新聞作りでまとめることが多くあるが、その新聞を地域のお店に張り出すなどを工夫するだけでも相手意識が出てくる。

## 2. 8年生の村民学「未来の担い手」のカリキュラム及び実践

ここでは総合的な学習の時間をベースとした8年生の「村民学」の実践を紹介する。8年生の村民学の年間テーマは「未来の担い手」である。これをPDCA<Plan/Do/Check/Action>のサイクルで取り組ませた。

### (1) 8年生「村民学」地域課題解決型学習の進め方

8年生「村民学」の地域課題解決型学習では、テーマを「白川村内でのお土産のお菓子の消費額の増加」と設定し、中心となる活動を「商品開発と販売」とし、実社会を積極的にカリキュラムに組み込みながら実施した。

### (2) 8年生の実践について

#### ①STAGE 1 テーマの設定と市場調査に向かうまでの流れ

##### i) Plan 課題の設定

白川村は世界遺産白川郷合掌集落を有しており、年間180万人の観光客が訪れている。しかし、村内での消費金額が一人当たり2,000円程度と他の観光地と比べ少ない。つまり、白川村に入る収入が多くないことを意味する。白川村役場の観光振興課では、この課題を解決したいと考えていた。そこで、8年生の「地域課題解決型学習」として、「観光客の白川村での消費額を上げるためのプロジェ

クト」を白川村当局（観光課）と連携して立ち上げた。

生徒たちは、初めに白川村役場の観光振興課のFAから、白川村の観光に関する情報を聞いた。次に、白川村の現状を外部人材のマーケティングの専門家が講話した。観光客の滞在時間は1～2時間程度で、他の観光地への通過点や写真を撮って次の目的地へ行くことが多いこと。村内で消費する品物としては、お土産が一番多いこと。そのお土産の中でも「お菓子」の購入額が最も高く、お菓子の売り上げを伸ばすことが一番村にとって収益が出やすいことを学んだ。ただ、お土産のお菓子のほとんどは村外の商品で、村内での収益が大きくは見込まれないことなどの説明も聞いた。白川村役場の観光振興課のFAから、「8年生で何か取り組んでほしい」との依頼を受け、8年生が「白川村を象徴するお菓子の開発」をテーマとして設定した。

#### ii) Do お菓子づくりチームの結成

このカリキュラムを進めるうえでは、専門的な知識と技能を持つ人材を活用することが必要であった。事前に外部人材の協力は得られていたが、生徒にはその情報を伝えるのではなく、「お土産のお菓子を開発する上で必要な人材はどんな人？」と投げかけた。すると、お菓子を作り人、販売する人、価格などを決める人など様々な意見が出された。その生徒の意見をFAに伝える形をとった。そして、観光振興課のプロジェクトを活用し、マーケティング、プロモーション、お菓子開発、パッケージの4つの専門家を招くことが決まった。

#### iii) Check 市場調査の計画と調査項目の検討

市場調査を行うために、8年生16名をマーケティング、プロモーション、お菓子開発、パッケージの4つのチームに編制した。各チーム3～5人であり、少人数であるため一人一人が重要な立場となる。この一人一人に責任を持たせることは重要であり、役割がはっきりすることで見通しを持つこともできた。そして、プロジェクトの始めの大きな活動として、「市場調査」を設定した。これは、実際にお土産店の調査を行い、そこで情報を収集し、分析し、各チームの戦略につなげる活動である。

専門家と連携した活動により、生徒たちは自分たちにはない視点を与えられる。このことにより、お菓子を見て、どこで作られたのか、どのように作られ、どのような工夫があるのか、パッケージの工夫など、多くの視点を持つことができた。

#### iv) Action 中間交流会 市場調査の調査項目の交流

4つのチームに分かれたことにより、各チームがどのような視点で調査するのかは、全体では確認されていなかった。そこで、各チームの調査項目を互いに発表をしよう活動を行い、チームとしてお菓子を開発するという意識と、自分たちが知らなかった視点を聞き、気づきを持てるようにした。

例えば、マーケティングチームでは、価格がどのように決まるのか、いくらのお土産が売れ筋なのか、何グラムで何円なのかなど、価格に関する項目が多く、いくつ売ればいくら儲かるのかなど数字で考えて発表していた。プロモーションチームでは、販路につながる視点や陳列の仕方、客層、外国人向けの商品と日本人観光客の違いなどターゲットや売り方についての視点多くあった。お菓子開発チームでは原材料や加工法、味の種類など味に特化し、パッケージはデザインや包装の仕方などを視点としていた。このように課題を設定し、市場調査開始までを一つの大きなPDCAサイクルとしてまわした。



図4 専門家との打ち合わせ

### ②STAGE 2：市場調査と調査結果を受けて商品を開発するまでの流れ

#### i) Plan 市場調査に向けて

前回までに市場調査の調査項目を考えた。ここで、すぐ調査活動に行くのではなく、一度立ち止まりなぜ調査活動をするのか、どんな目的があり、成果を期待して調査に行くのかというねらいを改めて考える時間を設定した。生徒の中から、「限られた時間の中で、確実に成果を出したい。調査の目的を再確認できてよかった」という声が聞こえた。

#### ii) Do 市場調査

各チームで考えた調査項目や視点を基に、お土産店に行き、市場調査を行った。

各チームは専門家と一緒に調査を行うことで、専門的な視点と知識をもらいながら調査することができた。例えば味チームであれば、原材料を見て、このお菓子のおいしさの秘密は何か、加工法はどんな方法なのかなどの助言をもらった。マーケティングチームであれば、お菓子のグラム数と価格の関係を調べていた。プロモーションチームは実際に販売する際、どのお店で、どこに陳列できるかまで考え調査していた。

### iii) Check 市場調査で得られたデータの整理・分析

市場調査の結果を整理、分析し、自分たちが開発し販売するお菓子づくりへとつなげるための活動を行った。

そして、市場調査を行い、実際の商品を通して分かったことをまとめた。また、地元だからこそ、お土産店にはなかなか立ち寄らなかったことがあり、多くの白川村に関する商品が売られていること、しかしそのほとんどは白川村ではない製造場所や販売会社であることを改めて知った。

販売している商品や店の売り方などについて、専門的な視点をもって調査し、分析したことにより、開発する商品に対して具体的なイメージを持つことができた。

### iv) Action 市場調査の調査結果発表と開発する商品の見通し

4つのチームが一つとなり商品が開発されることから、自分のチームの内容だけを知っていればよいわけではない。そこで、4つのチームが分析した結果を報告する発表会を行った。各チームとも自分たちのチームに対する愛着があり、自分のチームの報告に対してどのような考えを持っているかを仲間に聞きたいという意欲的な姿が多くあった。パッケージチームは「直感的に、いいなあ、買いたいなあと思ってもらえるのはパッケージを見てです。」プロモーションチームは「どのように売るのが、買いたくなるような戦略が大切です。」マーケティングチームは「やはり、価格が大切。価格設定をどうするか。」味チームは「商品はお菓子。誰からも愛されるお菓子、味が大切。」とそれぞれのチームごとに主張した。

## ③STAGE 3：商品開発とテスト販売までの流れ

### i) Plan 商品開発と今後の見通し

いよいよチームごとに開発する商品をどうしていくのかを決定し始めた。

味チームでは、市場調査や仲間の意見を参考に5つの味に絞り込み、開発を依頼した。パッケージチームでは、販売されている商品や自分たちが描きたいイメージを参考に素案を考えた。マーケティングチームは販売価格と売り上げの一部の在り方について検討を始めた。プロモーションチームは、販売に際し、何が必要で、どのような戦略を立てて、販売するかを提案した。

### ii) Do 村内でのテスト販売にむけて

白川村では「どぶろく祭り」という行事が村内で行われる。この祭りは、県外や海外からの観光客も多い。この日に合わせ、村内でテスト販売を行い、各チームが得たいデータを収集することが目的である。同時に、今後行われる高山市での販売の経験を積むことも兼ねており、また職場体験、キャリア学習、消費者教育、起業家教育など様々な視点においてもこの活動は意義があると考えた。

### iii) Check 品評会の実施

ここまで生徒と4人の専門家と共に商品を開発してきた。そしてテスト販売で販売する商品が開発できたこのタイミングで、保護者と一緒に品評会を行った。学校としては授業参観日ではなかったが、本校ではPTA行事として「親子行事」という制度があり、親子で教育的な活動をする日を一日設定できることから、この日を設定した。保護者の関心も高く、通常の授業参観よりも倍近くの保護者が参加した。保護者は大人からの視点で、この商品に対する意見を述べていった。生徒たちも親としてではなく、顧客としての意見を集めることを意識し、データを収集した。



図5 専門家から助言をいただく



図6 調査結果を分析し、戦略を考える



図7 専門家、保護者、生徒合同の品評会

iv) Action 村内でのテスト販売

これまで開発してきた商品を村内で販売することが決定した。生徒たちは何を準備しなければならないのかを考えた。販売活動が初めてのため、何が必要か分からない部分があった。また販売を促進するためのポップづくりやのぼり旗づくりも同時に行われた。この段階になると、保護者の関心も継続し、保護者からも消費者目線でのアドバイスを受けるようになってきた。予約販売を考えた生徒もおり、予約表を作ったり、村内の放送を使ったりと様々な工夫が見られた。

執筆段階ではこの段階までの実践をしている。そのため、今後のカリキュラムの計画を次に示す。

④STAGE 4：高山市での販売から正式の商品の開発へ

正式な販売に向ける販路の確定と今後の商品の展開についての検討にかかる実践 (PDCA)

⑤STAGE 5：販路の確定と拡大

高山市での販売を総括し、正式な商品としての登録と安定した販売路線の確定の実践 (PDCA)

IV 考察

4月と9月に行ったアンケート結果について表3に示す。

このアンケート結果を田村知子の「カリキュラムマネジメント・モデル」<sup>2) 3)</sup>に依拠し、考察する。

(1)「反映」の視点

本校の教育目標の「ひとりだち」は白川村の教育目標と同じである。さらに本実践では、教育目標の具現に向け、村民憲章と関連させたカリキュラムを開発し、その実践を行っている。この点においては、カリキュラムを開発する上で、学校の教育目標、村の教育施策を十分反映し、特徴的であるといえる。また、生徒の意識アンケート結果でも、4月時で75%が「村民学」との関連を知っていたことから、この実践が行われる前のカリキュラムの成果と言え、9月時には100%の生徒が関連していることを意識できていることは成果と言える。

(2)「成果」の視点

実践が半ばであるため、成果を評価できるほどの十分なデータが得られてはいないが、地域課題解決型学習をFAや外部の専門家と相談を重ねながら、PDCAのサイクルを行い、さらに改善を加えながら生徒と共に実践している点では成果と言える。また、生徒が行っている探究的な学習の過程もPDCAサイクルで行っている。生徒のアンケート結果を見ても生徒が課題を発見し、課題解決に向かっていることが分かる。

(3)「相互関係」の視点

今回の実践では、担任と学校地域連携協働本部のFA、そして4人の専門家が連携し実践を進めてきた。9月に「特産品のお菓子が完成したとき」という条件を与えたうえで、4月と同様のアンケートを行った。「実際に貢献できていると思う」と答えた生徒が、81%となった。これは、この実践を通して直接白川村の課題を解決しているという意識の表れであり、このような結果になるには、このカリキュラムを実施していることや専門家などの協力が不可欠であったと考えられる。

(4)「影響」の視点

生徒の多くは白川村に貢献したいと考えている。これは、学校の教育目標「ひとりだち」を意識している姿である。生徒へのアンケートで「村民学が、学校の教育目標「ひとりだち」や「村民憲章」と関連していることを知っているか」という質問では93%の生徒が知っていると回答した。生徒のほとんどがカリキュラムの構成を理解しているという点では、新しく「村民学」を設置した効果は高いと言える。

(5)「リーダーシップ」の視点

田村が提唱する「カリキュラムマネジメント・モデル」は中心にリーダーシップが位置している。それだけ、リーダーシップが要であることを意味している。本校では校長をはじめとする管理職が、「村民学」を積極的に推進している。そのため、各担任は動きを活発にしやすくとともに、担任では

表3 4月と9月に行った生徒への意識アンケートの結果 (n=12)

生徒へのアンケート n = 16 質問項目	調査時期	強く思う—思わない			
		1	2	3	4
「村民学」の学習は将来役に立つ	4月	25.0	43.8	31.3	0.0
	9月	56.3	31.3	12.5	0.0
「村民学」では自分たちで課題を見つけ、解決に向かっている	4月	12.5	43.8	37.5	6.3
	9月	50.0	25.0	18.8	0.0
「村民学」は教育目標や村民憲章と関連していることを知っている	4月	37.5	37.5	0.0	12.5
	9月	68.8	31.3	0.0	0.0
白川村に貢献したいと思っている	4月	68.8	18.8	12.5	0.0
	9月	75.0	18.8	6.3	0.0
実際に貢献できていると思う	4月	25.0	31.3	31.3	12.5
	9月	56.3	25.0	18.8	0.0

単位：%

できない部分をフォローしてもらっている。教務主任も時間割を柔軟に対応し、「村民学」が運営しやすいように工夫している。このリーダーシップが発揮されていることは、担任にとって重要であり、カリキュラムを進めながら編制しやすい環境を生み出している。

#### (6)「連携・協働」「規定・支援」の視点

実践内容でも紹介したように、本実践では学校地域連携協働本部のシステムを活用し、各学年に地域から一人のFAが配置されている。そのため、FAを通して人的・物的資源を効果的に活用できる仕組みができています。また、PTA行事の「親子行事」をカリキュラムに組み込んだことにより、保護者にも本実践について知る機会があっただけでなく、保護者がこの実践に助言をするなど参画している。この点も成果と言えるであろう。

## V まとめと課題

### 1. 9年間一貫したカリキュラムの開発 学校の支援体制について

本校では、義務教育学校の特色を生かし、特別な教科「村民学」を設置した。そして地域の教育力を活かすために、コミュニティ・スクールのシステムを活用し、ふるさとサポーター制度を設け、村民のよりどころとなる村民憲章と9年間のカリキュラムを連動させた。このことにより、児童生徒は白川村について、深く学ぶ機会が与えられたものと考えている。顕著なのは、生徒のアンケート調査で、100%の生徒が「村民学と村民憲章の関連」について答えられている点である。また、「村民学」立ち上げ初年度で、卒業時の9年生の生徒が、村民学と発達段階におけるイメージを作成できている点から、生徒と教師が新しい教科「村民学」のイメージを共有できていると言える。また、保護者も各学年の村民学で何を学習しているのか、取り組んでいるのか認識している。さらに、村当局や外部人材の活用など、学校教育への協働性も充実しており、社会に開かれた教育課程の具現の姿と言える。

### 2. 実践を通してみえてきた「学びの深さ」と今後の課題について

今回は8年生の実践を紹介した。開発したお菓子の商品名は「ゆいのわ」である。この「ゆい」という言葉は、6年生で学ぶ「結の精神」のことである。開発段階のパッケージには、白川村の米や豊かな農村、そして合掌造りが描かれている。生徒たちは、ただお菓子を開発しただけでなく、1年生のころから学んできた白川村の自然や文化を見事に表している。タイトルやパッケージから「今までの学習を通して、積みあがった白川村への愛情」を感じずにはいられない。

課題点としては、各学年との連携である。各学年で創意工夫した村民学の実践がなされているが、学年相互の関連と、学びの積み上げという点からはまだまだ改善の

余地があると感じている。例えば、学園の最後に上級生が下級生に「私たちは、今年〇〇について学びました。学習を通して白川村の～についての新しい発見がありました。来年は〇〇にチャレンジします。」のような発表会を行うだけでも、下級生は次年度への見通しを持つことができる。教師も他学年がどのような内容を行い、誰を活用し、どのような年間の営みをしているのかを普段から交流することができれば、この課題点は改善の方向に向かうと考えている。村民学の取組は始まったばかりである。児童生徒が白川村の自然・歴史・伝統・文化を深く学び、未来に向けて発信できる実践を一層進めたい。

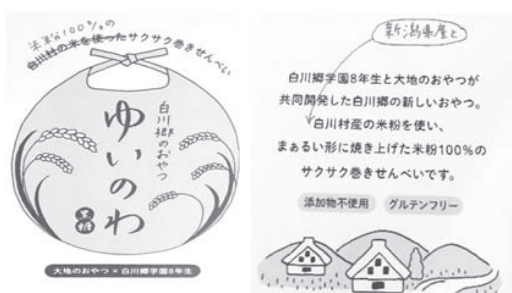


図8 完成した「ゆいのわ」のパッケージ

## 注・文献

- 1) 文部科学省 (2018) : 総合的な学習の時間の成果と課題 平成30年10月1日教育課程部会資料2-1, 3.
- 2) 田村知子 (2014) : カリキュラムマネジメント — 学力向上へのアクションプラン —, 日本標準ブックレット, 16.
- 3) 田村はカリキュラムとマネジメントを一体として考えているため、「カリキュラム・マネジメント」とカリキュラムとマネジメントを区切らず、「カリキュラムマネジメント」と表記している。